

「直ちに」
影響はないは
そろそろか

1億5000万円のうち

1億2000万円は税金が原資に

広島の地元紙「中国新聞」は1億5000万円のうち1億2000万円は税金を原資とする政党交付金だったと報じた。折しも6月30日の自民党総務会は、昨年の参院選を巡る党本部の対応に国会議員たちの不満が噴出し、大荒れとなったと翌日の毎日新聞は報じている。その内紛とは

参院選広島選挙区を巡り、自民党本部は、公職選挙法違反(買収)容疑で逮捕された河井克行前法相と妻の案里参院議員が支部長を務める政党支部に計1億5000万円を提供しており、買収事件の原資として使われたのではないかという疑念が支援者らの間でもくすぶり続けている。そこに黨員120万人の獲得方針が執行部より提起、それに対し「どういうカネなのか、しっかり説明しないと黨員獲得どころか、黨員をやめる人が続出している」「どうい理由で1億5000万円にたったのか。その用途は何だったのか」の発言が続出、広島県連に所属する参院議員の宮沢洋一元経済産業相は「地元ではカネを受け取った議員や首長辞職しており、支援者から攻められている」と窮状を訴えたという。とは言え他党内紛など関係ないとはならない。すでに述べているように1億5000万円と

000万円と言うのは大金である。例えば2020年度の社民党の政党助成金は3億6000万円であった。約半分弱の金が一人の一回の選挙資金に使われた。さらに政党助成金は税金である。国民一人あたり年間250円を負担していることになる。しかも「金をめぐる法律違反」の事件であり、自民党内紛で済ますことはできない。

10倍の差は「幹事長」の一存ではできぬ

(自民党石破元幹事長・中国新聞7月3日)

さらにその支出には、安倍首相や二階幹事長は「公認会計士が厳格な基準に照らし、事後的に各支部の支出をチェックしている」と説明し、買収との関連を否定してきた。しかし、「ここに来て二階幹事長は後の記者会見で「党として支出し、ご本人から受け取りが提出されたところまでは分かるが、その先がどうなったかということとは細かく追及していない」との説明を変え、しかもその真相を追求していない。また2012年から2年間、幹事長を務めた石破議員に対し「幹事長が選挙の資金支援で10倍の差をつけたことがありますか」という質問に対して「それはない。10倍の差は幹事長の一存ではできない。『なぜあの人だけ』と党内に不満が充満し、統制が効かなくなる。二階幹事長ほどの老練な政治家がそんな判断をするかな。

そうするともつと上か。推測だが」と答えている。

一家三人の生活費が右から、左へ 許せない

昔から代官と御用商人の「山吹色」との譬えの「金」の怪しい使い方が語られてきた。河井代議士夫妻は自民党を離党したが議席は有している。自民党もまた「除籍も除名も、そして議員辞職も求めていない」。まさに不思議な、そして怪しいな関係である。加えて、本意であれ、不本意であれポケットにねじ込まれた地元の政治家は公職を辞している。しかし、当の本人は、今もって自らの行為を不法とは認めていない。「金は渡した。しかし頼むとは言っていない」ということなのだろう。これって、まさに「究極の忖度行為」と言えないか。そしてそれらが「森友学園・加計獣医学・桜を見る会・カジノ汚職」などで国民が見てきた「金まみれと・忖度」に結び付く。相手のポケットにねじ込んだ当の本人にとっては何でもない金額かもしれない。しかし、10万円は一家三人の一ヶ月の生活費に匹敵する金額である。しかも夫妻には公判中も月額100万円を超える歳費が支払われる。許せない。即座に議員辞職と司法の決着を求めるものである。安倍首相は解散、総選挙で一切をゼロにするつもりか。

「ニュースを読んで」「この国の有権者がどこまで本当に怒っているのか、私はまだまだ信じかねています」との声がある。残念だが、そうであったは欲しくないものだ。(文責・降矢)



背伸びをせずに

身の丈を意識した生活習慣を!!

今回は、いっぴく読者からの反響が大きく、そのための特集を組まれたとのこと。その結果、より多くの方の、多彩な反応が伝わる紙面になったことを、お喜び申し上げます。やはり、媒体は、双方向で情報や感想、意見が流れてこそ活気づくものだということを、生き活きと示す号になったと感じています。今回のコロナ禍で、日常をめぐる社会活動がすべてストップしてしまつた結果、感じるものが二つありました。

一つは、自分を取り巻く社会環境がフリーズしてしまつた結果、これを打開する道はふたつしかないことに気づいたことです。それは、世界の誰とでも、どこでもつながる「リモート」の道です。新しいZOOMなどのソフトを使えば、それこそ外国でも国内のどの人々とも、「対面」でつながり、対話することができます。これはたしかに、新しいコミュニケーションの可能性を示すものです。今回、大幅に浸透した「テレワーク」や「リモート授業」も同じでしょう。でも、「リモート」は、現実のコミュニケーションの「補完」になつても、代わりにはなりません。それはあくまで、実際に会えない場合の補足や補完にとどまるでしょう。

もうひとつの道は、ローカルへの回帰です。「ローカル」といつても、これまでの言葉でいえば「日常」ということです。「の間」、「社会的距離」とか、「行動自

粛」とかで、ほぼすべての集会やイベントが中止や延期に追い込まれましたが、私は相手が合意してくださる限り、公共交通機関は避けて自転車での相手のところに向かがい、かなりの距離を置いてマスクをしたうえで、お話をうかがってきました。たとえば、同じ町に住む方でも、ZOOMで話しかかうことはできます。「こんな時期だから、ZOOMで話しましょう」とおっしゃる方もいます。でも、そうでない限りは、実際にお目にかかつて、話をうかがうようにしてきました。それは、ローカルな環境では、互いに配慮し、距離を置きながらも、実際に会える環境にあるからです。

つまり、これまでの「リアル」な環境がフリーズした結果、日常は二つの方向、「グローバル」と「ローカル」に分かれ、前者には「リモート」で、後者には対面で、コミュニケーションをとる方法がある、と気づかされたわけです。

これは、「ニュース」にもいえることではないでしょうか。この数号、「ニュース」は、身近な検査・医療体制充実や、住民の政策決定への参与を呼びかけ、発熱外来や、症状別の治療の方法などを具体的に報告してこられました。「何もできない」ことを強いられた結果、人々は見知らぬ人と連帯して声をあげる「ツイッター」で黒川氏の辞任と定年延長の断念をもたらし、その一方で、ローカルへの回帰を模索して、自分にもできる身近な問題を解決する道を模索しているのではないのでしょうか。

この二つの流れ、「グローバル」へのリモート参加と、「ローカル」へのリアルな参画は、背反しあうも

のではなく、両立できるものだろうと、私は思いま

す。もう一つ感じているのは、すべての活動がストップした結果、これまでのように無理に無理を重ね、背伸びをするだけの姿勢が限界に達していることに気づき、「身の丈」を意識するようになったことです。これからは、すべてを元の状態に戻すのではなく、自分にとって大切なもの、欠かせないことだけを戻し、必要でないもの、ただ見得のため、見にくれのためだけに「必要」と思い込んできたものは、「再開」しない、という思いが強くなっています。つまり、この間の社会的な活動の停止は、私たちに、社会的「断捨離」の機会を与えてくれたのかもしれません。

第一波もようやくピークを過ぎましたが、早くにピークアウトした外国では再発や「第2波」の兆候が出てきています。気を緩ませることなく、しかしローカルな日常を取り戻し、身近な生活や医療体制を充実させることに力を注ぐ時期なのだという気がしています。興味深くみずからの問題として読んでいます。



いつも「ニュースを読んで」のコーナーに参加して頂きありがとうございます。今回のご提起は、ページをあらたに設けて掲載をさせていただきます。タイトルは事務局が書きました。ご了承を【

(事務局)

【ニュースを読んで】



■いつも拝読しています。黒川問題、河井問題、イギリス・アシアノア問題と続いて、さすがの安倍政権も断末魔かと思いつつ、この国の有権者多数がどこまで本当に怒っているのか、私はまだまだ信じかねています。

■都知事選でかけずりまわりましたが残念でした。連合東京は小池支持を打ち出しました。労働組合としてのあるべき方針とは何か、疑問を感じます。また残念なのは社民党の姿が見えないことと、党員に対する知事選の戦い方についてしっかりとした方針提案や具体的取り組みの支持が示されないことです。社民党としての主体的方針は当然持つべきでしょうし、年内にも想定される衆議院選挙に向けた取り組みも併せて考えることだろうと私は思います。さらに日常活動のなさが、市民に対する党としての日ごろの対応が問われていることを痛感しております。それでも行動しないことには少しも進みません。暑さに負けず頑張るしかないと言いつつも聞かせながらの毎日です。夕飯時に妻に「成果のほどは」と冷やかされ、年なのだからいい加減に休んではと説教されています。福島の会ニュース拝読し、ニュースを読んでいる会員の方々には勇気を与えるものになっているものと思います。

■ニュースとメールどうもありがとうございます。私もそろそろ活動に戻りたいと思っています。

■今年も早半分が過ぎようとしています。新年

早々からのコロナ騒動で生活のリズムが大分変わりましたが何とか健康を維持しております。一昨日「越境OK」となりまたぞろ感染者が増加されそうです。国民皆保険と同様に「PCR検査」の受診促進が肝要と思います。検査率も欧米各国はダントツに高い。例えばフランスにおいて日本のメーカーとフランスのメーカーが共同開発した全自動PCR検査システムと試薬キットがウイルス検出に大きな役割を果たしていることで、フランス政府から日本の製造会社に対し「感謝状」が贈られたということを知りました。それは日本では認可までに時間が掛かることから、サーズ流行時に、日本の技術が欧米向けに輸出されたものであるとのこと。安心、安全が優先されるべきであるにもかかわらず。第2・3波に対し十分な対策を今から構築を期待したいですが「レームダック」(役立たず)の政権では無理ですかね

■いつも情報を有難うございます。6月定例市議会で市政一般質問をします。いろいろ問題が山積していますが、わたしなりに頑張っていこうと考えています。

■いつもながらのご丁寧なお知らせに心から感謝申し上げます。それにつけても月日の過ぎるのは早いものですね。ニュースで述べておられる現況が、我が身にすっぽり当てはまる思いです。健康に留意しながら7月号を楽しみにしております。

■おつしやることその通りですね。コロナ禍で、多くの人たちが「政治を身近な自分たちの問題だ」と感じて欲しいと願っています。

■社民党県連もようやく全戸チラシを入れることになりましたね。トリチウム汚染水海洋放出問題は予断を許さない厳しい状況が続いています。

■読者の意見を掲載するのは、字数の問題も含め大変なことです。国会も閉幕し、都知事選も終わりあとは解散総選挙です。耳目がコロナに集中し、最も基本的な党活動である街頭での活動も制約を受けています。このまま、安倍の都合の良い時に解散されたら社民党は恐らく惨敗が危惧されます。3月4日の「社会新報」で、とりあげられた「気候非常事態宣言」運動を進めるための具体的指導を、9月議会を目標して行うように県本部に申し入れをしました。何か行動を起こさなければの危機感を、党の中心にいる地方議会の議員がまず持たねばならないと思います。

■オンライン授業というので、もう朝から夜までメールがたくさん届き、一つひとつのチェックが遅れています。第2波は確実にきます。無責任な政府によって命が粗末にされるのは戦前と変わありません。大本営発表を垂れ流すメディアの責任も大きいです。このニュースのようなミニコミが大事です。

■立民との合流話が再燃したようにも見えましたが、ここへきて立民の支持率に大きく陰りが出ているようで、どうなることやらですが……。「もう自粛は嫌だ」という声、周りでは聞かなくなりました。観光地です。先日は人出が20%を上回り、地元住民は無法な観光客に辟易としています。自粛が嫌な人が多いことは良く分かります。実際、宣言解除前も観光客で賑わっていましたし、洋の東西

問わず外国人で溢れていました。改憲だけは、何としても阻止しなければなりません。9条ではない。主権・人権・平和主義の剥奪との戦いです。9条にばかり注目させるような運動はかえって足かせになっています。そこに気づかないと、永遠に騙され続けるでしょう。今回も読み応えのあるニュースでした。皆さんの頑張りには素直に頭が下がります。

■ニースNo.159号、感想や思いの特集、今の党を支えてきた方々の切実な声で、これを運動の高揚期のナツメロと葬つてはならないと思います。

■ニース7月号本文の5点の問題提起については全くその通りと思います。そして、第2波への備えをしなければならぬ今、なぜこれからの検査体制、医療体制、方針など、政府・厚生省から全く示されることがないのか、不思議でなりません。西村担当相の「もう自粛などしたくないでしょう!？」という会見を聞いていると、「コロナ対策の責任は国民の努力にあり、政府にはなんの責任も方針も、やる気も無い」としか聞こえませんでした。「ニースを読んで」の参加者が増え「特集号」にされたとのこと、読者のみなさんの気持ちが変わるような気がしました。コロナという危機はたくさん問題をおぼろげに押し出してくれました。その危機に対して、一強と言われ続けた政権があまりにも無策で対応能力が欠如していることに、我慢がならぬ気持ちがおぼろげに押し出しているように思えました。



格差拡大が、コロナを通して明らかに

自粛はもう嫌だ」、そのような気分が「県を超える移動の制限の解除」もあって、猛暑も一段落した6月2週目の土、日の二日間は、近くにある「売ります・買います」「ゲームセンター」「ハンバーガー店」「イエローハット」「100円ショップ」そして「量販店」の広大な駐車場は満杯となりました。

確かに、町中のスーパーや飲食店などはガラ空き続きでした。そこで働く労働者の多くは、パート・アルバイト・派遣といった低賃金の皆さんでしょう。しかしそれでも働く場がありました。子どもへの三度の食事も粗末ではあれ用意をすることができたであろうと思います。しかし、そこに「派遣を切られて絶望。交付金支給10万円がより頼み」という新聞記事の見出しを見ることになりました。アメリカにおける警察官の殺人事件が大きき抗議行動となつています。そしてその抗議は「人種差別」を超え、所得格差に対する「怒り」であることが明らかになっていきます。つまり「コロナ」による死亡の圧倒的多数が黒人であるということとです。

3年前でした。「保険証がないねん。先生、湿布くれ!」という見出しで報じた記事が、全国の注目をあびました。児童が学校で突き指をして腫れてきたら病院へ行くよう養護教諭に言われたが、その子の親は失業中、金も保険証もないから病院には行けなかったのです。

この格差の拡大が「コロナ禍」を通して明らかになつていることを認識したいと思えます。(降矢記)

シルバー・ヒヤリハット (一)

「風呂場で転倒、骨折をして治療中、それでも頭を打たなくて良かった」。これは高齢者が集まった中で飛び出す日常的な会話の一つです。家の中は、高齢者にとっては危険がいっぱいという事です。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

◆ヒヤリ・ハット(危険予知)の事例

◎1位はリビング・居間

70歳以上の高齢者のアンケート調査では、「ヒヤリ・ハットを経験した場所」として「リビング・居間」と答えた方が34.2%でした。リビングや居間は一見危険が少なそうですが、そこがかえって油断につながり「床や畳、そしてフローリング、敷物」につまずいての転倒となっています。

事例の二つをあげてみます。

■両手で物を持つてつまずき・転倒する。■ガスコンロに取っ手の長い鍋をかけていた。中は熱湯。床の中敷きの薄いカーペットにつまずき、手前の取っ手に危うく手を掛けようとした。

両手をふさいでの物を持ち運びは身体のバランスを崩す危険がある。長い取っ手の鍋は使わないか、取っ手は手前ではなく横にする。

